常　滑　市　の　概　況

沿　　革

本市は昭和 29 年４月１日、常滑町、鬼崎町、西浦町、大野町および三和村の４町１村が合併して誕生した。

その後、南部に隣接した小鈴谷町のうち、大谷、小鈴谷、広目および坂井の４地区が昭和 32 年３月 31 日に市域に加わり、現在の常滑市となった。

以前の歴史を探ると、昔、漁労の民が海岸沿いに、あるいは海を渡って当地に住みついたと想像される。平安時代後期の和名抄には知多贄代郷の地と記されており、永正４年（1507 年）の宗長宇津山記には「伊勢の国多気より大湊に出で、尾張の国知多郡常滑という津に渡る」とある。戦国時代を経て江戸時代には尾張藩の治下にあり、維新後は名古屋藩、額田県、そして愛知県に属した。

本市の地名「常滑」については、万葉集にも用例があり、「常」は床の義をとり、「滑」は滑らかの義にとるのが妥当であるとされている。古くから当地は粘土層の露出が多く、その性質は滑らかになっており、この粘土層全体をも「とこなめ」と呼ぶ習俗を生んだものとされている。

位置と地勢

（令和５年４月１日現在）

また、古くから焼物の産地と知られその歴史は平安末期から 900 年に及び、日本六古窯（常滑、瀬戸、信楽、越前、丹波立杭、備前）のひとつに数えられる。平成 29 年「日本遺産」に認定された六古窯の中でも常滑は最も古く、最大規模といわれている。